

平成19年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2008


新潟県長岡市教育委員会

平成 19 年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2008

新潟県長岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査のうち、平成19年度国庫・県費補助金の交付を受けて実施した調査の報告である。
2. 調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。
3. 本文の執筆は、1を駒形、その他は各調査担当者が分担した。編集は新田が行った。図版などの作成は一部で整理作業員の協力を得た。
4. 遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。
5. 土層柱状図における  は遺物包含層を示す。
6. 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。
7. 現地調査から本書の作成に至るまで多くの方からご協力、ご教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。

越後ながおか農業協同組合 大原技術株式会社 小国土地改良区 小国西部地区ほ場整備推進委員会
小国北部地区ほ場整備推進委員会 川東中央地区ほ場整備協議会 帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場
長岡地域振興局災害復旧部河川改良第2課 長岡地域振興局農林振興部農村計画課・農地整備課
中里北地区ほ場整備推進委員会 東保内集落 宮本4丁目ほ場整備推進協議会
石坂圭介 笠井洋祐 長澤展生 南波守

目 次

1	平成19年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2	寺泊潟地区試掘・確認調査	3
3	下ノ西遺跡隣接地試掘調査	7
4	梅田遺跡確認調査	8
5	二日町地区試掘調査	9
6	宮下地区試掘調査	10
7	中沢地区試掘調査	11
8	宮本前田地区試掘調査	12
9	宮本西田地区試掘調査	14
10	関原地区試掘調査	15
11	柿地区試掘調査	16
12	午ノ新田地区試掘調査	17
13	中の坪地区試掘調査	18
14	朝日上ノ山地区試掘調査	19
15	赤木地区試掘調査	20
16	小国北部地区試掘調査	22
17	小国西部地区試掘調査	23
18	中里北地区確認調査	24
19	中里北地区試掘調査	26

1 平成 19 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

長岡市教育委員会が平成 19 年度に実施した遺跡発掘調査は 31 件である（平成 20 年 2 月 1 日現在）。その内訳は本発掘調査 3 件、試掘・確認調査 20 件、工事立会い 8 件となる。このうち、本調査 1 件、試掘・確認調査 9 件、工事立会い 2 件が農業関連事業に伴うものであった。本書は 20 件の試掘・確認調査のうち、補助金の交付を得て実施した 18 件についての報告書である。

当初、平成 19 年度に試掘・確認調査を予定していたのは 12 件であった。しかし、開発事業の延期ないしは中止により調査に至らなかった事例が 6 件あり、その一方で、年度途中に急きょ試掘・確認調査の必要が生じた事例は 14 件であった。近年、民間事業において、開発の計画から工事着手までの期間が短くなっている傾向にあるが、遺跡の隣接地のみならず、遺跡が発見されていない地区であっても、遺跡が所在する可能性がある場合は、試掘調査を実施して遺跡の保護に遺漏をきたさないようにしている。宮本前田地区の試掘調査によって黒川左岸の沖積地に新遺跡を発見した事例は、この体制の成果であろう。

遺跡隣接地の試掘調査は、和島地域の下ノ西遺跡などで実施した。下ノ西遺跡は大型の四面庇付建物跡や木簡などが出土し、郡衙との強い関連性から、八幡林官衙遺跡などと並ぶ貴重な遺跡である。この下ノ西遺跡の近くで農業用水路建設が計画されたため、遺跡の広がりの確認を目的として試掘調査を実施した。この結果、工事計画地に遺跡は広がっておらず、工事による影響がないことを確かめた。

また、農業関連事業のなかでも、信濃川大河津分水路の左岸、寺泊地域の潟地区を対象にした調査は、合併前の平成 6 年度からの継続事業である。平成 16 年度から 19 年度までの調査対象面積は約 282ha と広大なものである。事業地は、日本海と平行して南北に延びる東頸城丘陵からの沢や、円上寺潟に面する沖積地が対象地で、京ヶ入遺跡（縄文時代晩期）、本山舞台島遺跡（縄文時代晩期～弥生時代後期）など、周知の遺跡が汀線際に位置している。そして、昨年度から発掘調査が始まった五千石遺跡（縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期）や、玉作関連の集落と考えられる諏訪田遺跡（弥生時代中期）、古代寺院跡の横滝山廃寺跡など、地域の主要な遺跡が近くに所在している。また、イノシシの骨やクルミなどが出土したことで知られる幕島遺跡（縄文時代後期～晩期）や、古代の円面硯が採集された天王遺跡といった燕市の重要遺跡も本事業地に隣接している。

これまでの潟地区を対象にした試掘・確認調査で、周知の遺跡である居村前遺跡（縄文時代晩期）・草薙遺跡（縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代）、それに稲場遺跡（古代）は、推測していた範囲よりも広がることを確認し、そして新たに蔵地面遺跡（縄文時代晩期・古代）、野起遺跡（古墳時代）、中使面（古代）など、6 遺跡を長岡市の遺跡カードに加えた。今年度の調査では、幕島遺跡や天王遺跡が長岡市域まで広がっていることを確認した。なかでも天王遺跡は、平安時代の円面硯の破片が採集されているだけで、遺跡の内容や性格はよく分かっていない。それだけに幕島・天王両遺跡の広がりなどを確かめたことは、学問的にも大きな意味をもっている。

この潟地区の試掘・確認調査は、平成 20 年度に円上寺潟の周辺を対象に実施して終了する予定である。来年度の調査で、江戸時代終わりごろからの乾田化事業ですっかり干上がった円上寺潟の、かつての広がりを推定できる資料が得られることを期待したい。



写真 1 潟地区調査状況



第1図 平成19年度調査位置図 (1/250,000)

2 寺泊潟地区試掘・確認調査

調査地	長岡市寺泊本山・大地・当新田 ほか	調査面積	858.0 m ² (対象面積 719,000 m ²)
調査期間	平成 19 年 10 月 9 日～11 月 9 日	調査担当	加藤由美子

調査に至る経緯 県営経営体育成基盤整備事業（寺泊潟地区）に伴う埋蔵文化財の試掘確認調査は、平成 16 年度からの継続事業である。事業対象地の総面積は 505ha で、事業採択を受けた地区から順次に調査に着手しており、平成 16～18 年度の 3 年間で対象面積 210.4ha 分の調査を終了した。

4 年目となる平成 19 年度は、新規に事業採択を受けた潟 4 期地区（吉・箕輪・本山・弁戈天・大地・京ヶ入・当新田・白岩）の 71.9ha を対象に調査を実施した。調査では、用排水路予定地と周知の遺跡の周辺を中心に、2 m×3 m のトレンチを 143 箇所設定した。掘削はバックホウと人力で行い、埋め戻しには地盤沈下防止のため川砂を平均 30 cm 以上の厚さで充填した。

調査地の概要 調査地は東頸城丘陵の内陸側の平野部に位置する。平野の中央には第 2 級河川の島崎川が新潟平野方面へと北流し、潟地区はその下流域一帯を占める。かつてここには円上寺潟という大きな潟湖が存在した。潟地区という地名もこれに由来するものである。円上寺潟周辺では、近世前期から新田開発のための干拓事業が幾度となく試みられたが、東頸城丘陵と信濃川に阻まれ排水機能に乏しい地勢が災いし干拓事業は難航した。完全な乾田化は、大正 11 年（1922）の大河津分水路の通水後まで待たねばならなかった。現在は一帯に見渡す限りの良田が広がり、かつての潟湖の面影は感じられない。



第 2 図 調査地周辺の地形と遺跡の分布状況 (1/50,000)

調査地周辺には、旧円上寺潟を取り巻くように縄文時代から中世にかけての遺跡が密集する。特に、寺泊地域全体でも数が少ない縄文・弥生時代の遺跡が分布し、稲作開始以前の生活に円上寺潟が有益であったことがうかがえる。

縄文時代の遺跡には、法崎遺跡（中期）、居村前遺跡（中・後期）、京ヶ入遺跡（後・晩期）、幕島遺跡（後・晩期）などがある。弥生時代の遺跡には、河川工事中に土器が出土した本山舞台島遺跡がある。古代以降になると遺跡数は増加し、その分布状況は現在の集落とほぼ重なる。弁戈天遺跡は古代の在在地における須恵器窯として注目される遺跡であるが、詳細な内容は不明である。

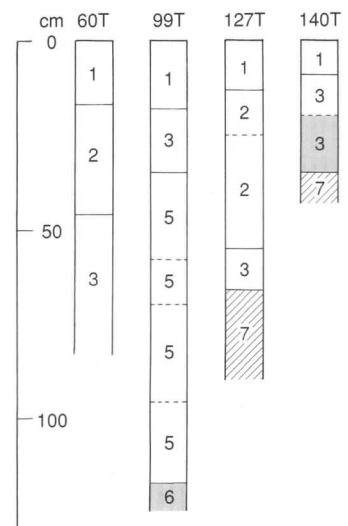
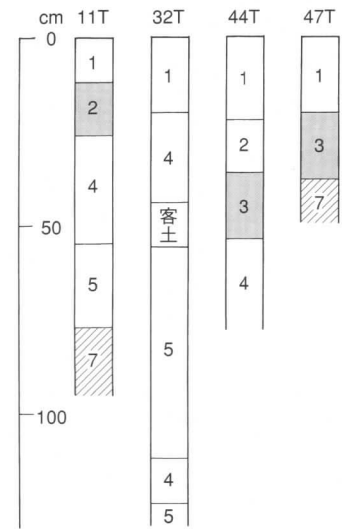
調査の結果 基本層序は2つのタイプに分けられる。丘陵裾部付近では、地山層である黄灰色粘質土が顕著に確認でき、これが基盤層となって遺跡が形成される。対して、かつての円上寺潟の周辺や標高9m以下の低地では、地表直下に明茶褐色のガツボ（植物腐植土）層が厚く堆積する。丘陵裾部で見られたような基盤層は確認できず、非常に軟弱な地盤である。居村前遺跡 11・12Tは後者に属するが、例外的にガツボ層の上面に砂質土が安定して堆積し、これが遺物包含層となっている。



第3図 調査区南半トレンチ配置図 (1/10,000)

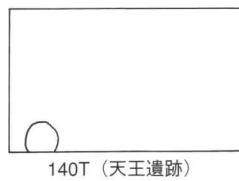
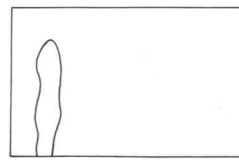


第4図 調査区北半トレンチ配置図 (1/10,000)



- 1 : 耕作土
- 2 : 暗灰色砂質土
- 3 : 暗灰色粘質土
- 4 : 灰褐色粘質土
- 5 : 明茶褐~
- 6 : 黒褐色腐植土
- 7 : 黒褐色砂質土

第5図 土層柱状図 (1/20)



第6図 遺構平面図 (1/80)

調査の結果、周知の居村前遺跡（縄文時代中・後期）と稲場遺跡（古代）の範囲の拡大を確認した。また、大地地内で中使面遺跡（古代）、当新田地内で幕島遺跡（縄文時代後・晩期）、そして白岩地内で天王遺跡（古代）の3遺跡を新たに発見した。幕島遺跡と天王遺跡は、市町村境を接する燕市域で既に周知化されている遺跡で、今回の調査によって遺跡の範囲が長岡市域へも広がる事が確認できた。

(1) 遺構 稲場遺跡 47Tで溝を検出した。検出面は表土下38cmの黄灰粘質土の上面、溝の規模は幅40cm、長さ120cm、深さ10cmである。覆土から平安時代の須恵器と土師器が出土した。天王遺跡 140Tでは、表土下35cmの黄灰粘質土上面で、直径約30cm、深さ5cmのピットを1基検出したが、遺物は出土しなかった。

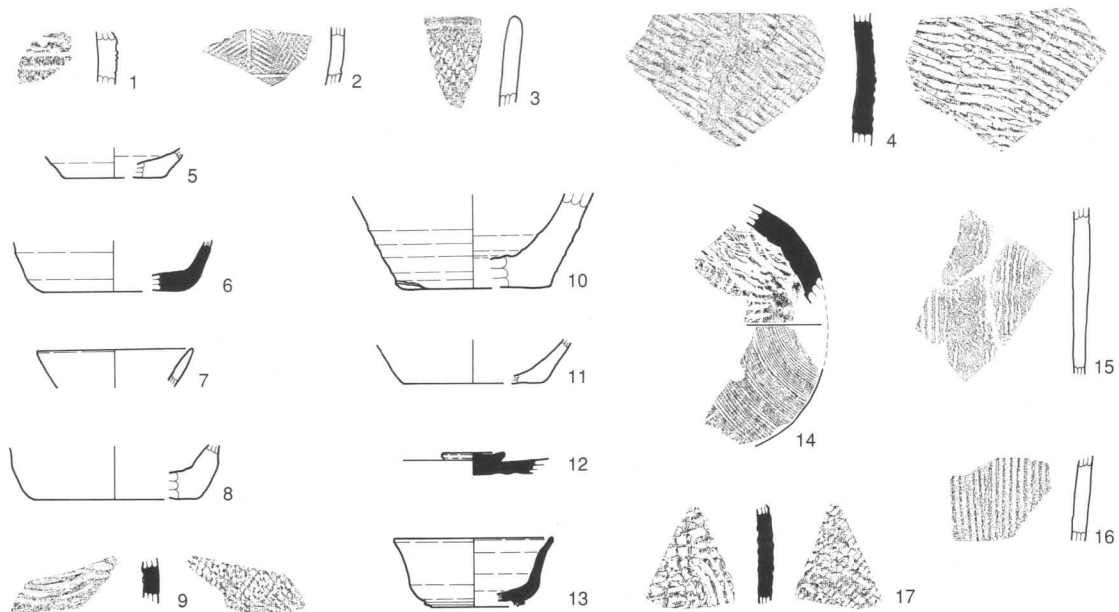
(2) 遺物 居村前遺跡、中使面遺跡、稲場遺跡、幕島遺跡、天王遺跡で土器が出土した。

1～3は、居村前遺跡 11・12Tから出土した縄文土器である。2は鉢の体部片で、矢羽根状のモチーフを施文する。縄文時代後期中葉の加曾利B3式に位置づけられる。4～6は、中使面遺跡 43～45Tで出土した須恵器と土師器である。いずれも9世紀代のものと考えられ、5の土師器はロクロ成形で底部を糸切りする。6の須恵器は焼成が甘い。同じように焼成が甘い須恵器は、近接する稲場遺跡でも多数採集されており、いずれの供給元によるものか興味深い。7～14は、稲場遺跡 47～49Tから出土した須恵器、土師器、珠洲焼である。珠洲焼は10の壺のみで、他は9世紀代の須恵器・土師器である。15・16は、幕島遺跡 99Tから出土した縄文土器である。15は撚糸文、16は条線文で、どちらも晩期後葉に位置づけられる。17は、天王遺跡 141Tから出土した須恵器甕の体部片である。この他、61・120・123・129・133Tでも土師器や珠洲焼が出土したが、微細な破片資料のため周辺の遺跡からの流れ込みと判断した。

まとめ 今回の調査により、湯4期地区には居村前遺跡、稲場遺跡、中使面遺跡、幕島遺跡、天王遺跡の5遺跡が存在することがわかった。これら遺跡の取り扱いについては、今後、事業者と協議を行う予定である。



写真2 調査地近景



第7図 出土遺物実測図 (1/4)

3 下ノ西遺跡隣接地試掘調査

調査地 長岡市東保内 調査面積 72.0 m²(対象面積 3,250 m²)
 調査期間 平成 19 年 10 月 15 日～16 日 調査担当 丸山一昭

調査に至る経緯 平成 19 年度以降実施される保内地区の県営ほ場整備事業計画について、長岡地域振興局農林振興部より埋蔵文化財包蔵地の照会があった。周辺には下ノ西遺跡が存在することから長岡市教育委員会はその取り扱いについて協議した。この結果、事業計画地のうち掘削を伴う排水路設置法線について試掘調査を行うこととし、下ノ西遺跡の広がりを把握することを目的に実施した。

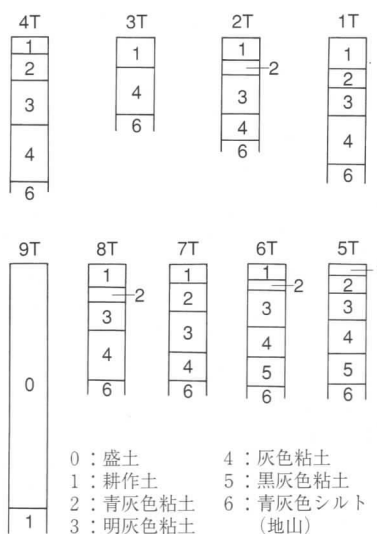
調査地の概要 調査地は東頸城丘陵の北東部、島崎川およびその支流の郷本川右岸に位置する標高約 16 m 前後の水田地帯である。調査地の東側には、奈良・平安時代の官衙関連遺跡である下ノ西遺跡や旧北辰中学校瓦窯跡など古代を中心とした遺跡が存在する。

調査の結果 2×4 m の試掘トレンチを 9 箇所設定し、バックホウによる掘削を行った。その結果、遺構は検出されなかったが、4 箇所から遺物が少量出土した。1 T・3 T・6 T では古代・中世・近世の遺物、8 T では古代の須恵器が出土した。いずれも付近の低湿地で特有に見られる石灰粒子を多く含む灰色粘土層（4 層）からの出土であり、流れ込みの可能性が高いと考えられる。これらのことから事業対象地区は下ノ西遺跡の範囲外であると考えられ、工事実施には特に支障はないことを事業者へ伝えた。

ただし、下ノ西遺跡や門新遺跡のように、小河川により形成された微高地上に立地する遺跡も確認されているため、周辺で新たに遺跡が発見される可能性もあり今後も開発に際しては協議が必要である。



第 8 図 トレンチ配置図 (1/10,000)



第 9 図 土層柱状図 (1/40)



写真 3 1T 土層断面

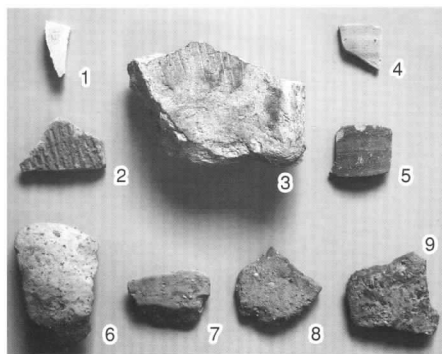


写真 4 出土遺物

トレンチ	層位	内容
1	3層	近世陶器(1) 須恵器(2)
1	4層	中世陶器(3)
3	4層	須恵器(4)
6	5層	土師器(6~9)
8	5層	須恵器(5)

表 1 遺物出土トレンチ一覧

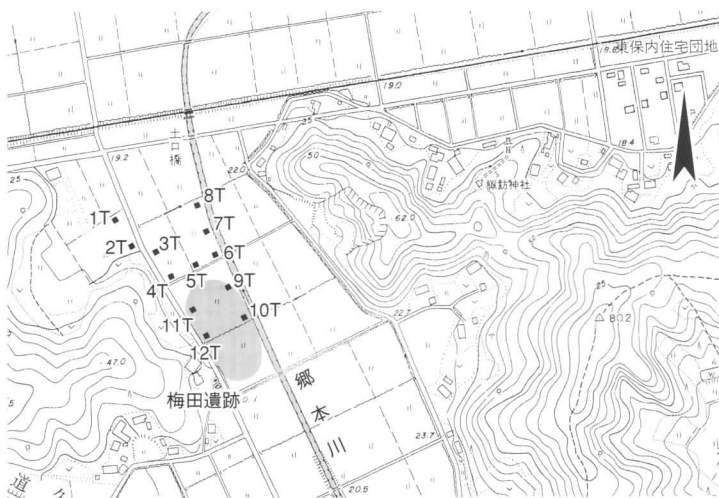
4 梅田遺跡確認調査

調査地	長岡市梅田	調査面積	27.0 m ² (対象面積 1,300 m ²)
調査期間	平成 19 年 10 月 17 日～22 日	調査担当	丸山一昭

調査に至る経緯 保内地区の県営ほ場整備事業が平成 19 年度以降実施されることにより、長岡地域振興局農林振興部から長岡市教育委員会へ埋蔵文化財包蔵地の照会があり、その取り扱いについて協議した。その結果、事業予定地内南端には周知の遺跡である梅田遺跡が存在し、遺跡範囲内に小排水路が敷設されることから、事前の確認調査を実施した。

遺跡の概要 遺跡は東頸城丘陵の北東部、島崎川の支流である郷本川左岸の丘陵裾部に位置する。郷本川に向かって緩やかに傾斜する谷地形に立地し、現況は標高約 18m の水田である。以前の耕地整理の際、古代の土師器や木材片が出土したと言われるが、現在、遺物の散布は極めて希薄であり、郷本川の土手斜面で風化した微細な土師器片を採集できたに過ぎない。

調査結果 1.5m 四方のトレンチを 12 箇所設定し、確認調査を実施した。その結果、中世の遺物が出土したほかは、遺構は検出されなかった。遺物は 1 T から出土し、珠洲焼の壺体部片と見られる。耕作土下の明灰色砂質土層からの出土であるが明確な包含層は認められないことから、周辺からの混入の可能性が考えられる。3～12T では地山上部に旧表土と見られる黒色・暗灰色粘土が堆積し、丘陵から郷本川に向かって緩斜面を形成している状況が確認できたが、遺構遺物ともに検出されなかった。また、2 T では未分解の腐植土層が堆積し小規模な川や沢が形成されていたと見られる。以上の結果から、工事予定地北側まで遺跡は広がらないことが判明し、工事の実施には特に支障がないことを事業者へ通知した。



第 10 図 トレンチ配置図 (1/10,000)

1T	2T	4T	5T	6T
1	1	1	1	1
		2	2	2
3	3	3	3	3
	P-1	4	4	4
4	P-2	6	6	6
8T	11T	9T	12T	10T
1	1	1	1	1
2			2	2
3	2	2	3	3
4	3		4	4
5	4	3	6	6
				6



写真 5 1T 完掘状況



写真 6 1T 出土遺物

- 1：耕作土・盛土
- 2：青灰色粘土
- 3：明灰色砂質土
- 4：暗灰色粘土
- 5：黒色粘土
- 6：青灰色シルト（地山）
- P-1：泥炭層・腐植土
- P-2：灰色シルト（腐植土を含む）

第 11 図 土層柱状図 (1/40)

5 二日町地区試掘調査

調査地	長岡市二日町	調査面積	9.0 m ² (対象面積 144.0 m ²)
調査期間	平成 19 年 10 月 11 日	調査担当	小林 徳

調査に至る経緯 平成 19 年 10 月 2 日に二日町地内にて計画中の携帯電話鉄塔建設について、埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。建設予定地は周知の埋蔵文化財の範囲ではないが、二日町館跡の隣接地であることから現地確認を行った。二日町館跡はその形状などが判然としておらず、周知の範囲外であっても遺跡が存在する可能性があることから、遺跡の不時発見を未然に防止するため試掘調査をすることで事業者と合意した。この合意に基づき 10 月 11 日に長岡市教育委員会が試掘調査を行った。

遺跡の概要 二日町は蒲原平野から会津への街道筋として、また栃尾盆地と下田郷を結ぶ要地として、塩谷川流域の舟運等を利用した市場町が形成されていたと思われる。この地に築かれた二日町城は、明治 20 年ごろに各地の古老の伝承などを集めた『温故の栞』によると、上杉家の三本木庄蔵により築城されたといわれ、その縄張りの形態から古志長尾氏の栖吉城の流れを引く山城であり、栖吉城築城と相前後して築城されたと考えられる。この二日町城の城主館跡が二日町館跡である。現在では耕地整理などによりその面影は無く、わずかに更正図などから類推するのみである。館は堀に囲まれた方形と想定されるが、耕地整理前には民家となっていたため、詳細は不明である。さらに周辺には寺屋敷、鍛冶屋敷などの小字名もあり、かつての繁栄をしのばせる。このように経済・軍事の要衝であった二日町城も戦国時代の終焉とともに次第に衰微したと見られ、文献からも姿を消した。

調査結果 1.5m×6.0mのトレンチを任意に設定し、バックホウにて慎重に掘削をした。

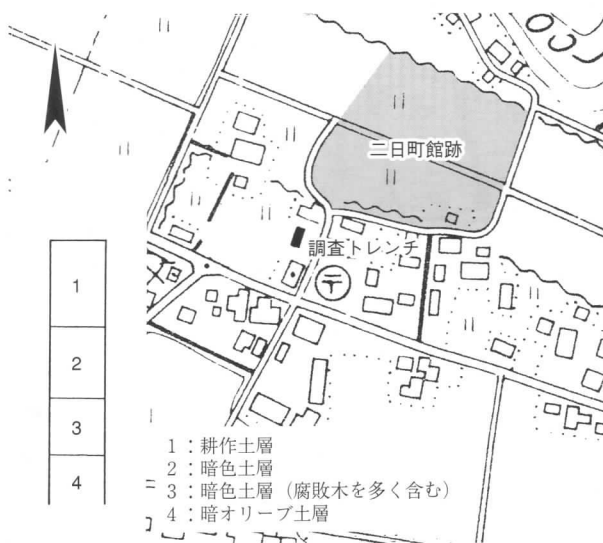
結果、遺物・遺構の検出は無く、遺跡の可能性が低いと見られ、工事に支障がない旨を事業者に伝え、調査を終了した。



写真7 調査地近景（奥の山が二日町城跡）



第 12 図 調査地周辺図 (1/25,000)



第 13 図 トレンチ位置図 (1/5,000) 及び土層柱状図 (1/20)

6 宮下地区試掘調査

調査地	長岡市宮下町字榎町 ほか	調査面積	24.0 m ² (対象面積 3,584 m ²)
調査期間	平成 19 年 11 月 9 日	調査担当	鳥居美栄

調査に至る経緯 宮下地区工業団地の拡張が計画され、平成 19 年 10 月、長岡市商工部企業誘致課と協議を行った。事業地周辺は周知の遺跡が所在しており、事業地内に遺跡が広がる可能性があった。協議の結果、調整池や工場の建設により現在の水田面以下への掘削が計画される範囲において試掘調査を行うこととなった。盛土を行い、現水田面以下への掘削を行わない区域については調査対象から除外した。

調査地の概要 調査地は、東山丘陵裾から西に約 1 km、宮下町や富島町の集落から東に 100~200mほど離れた沖積地にある。現況は水田で、標高は 17.5m である。富島町などの集落が営まれている自然堤防の縁辺において、古墳時代や古代の遺物を出土する火焚面遺跡や榎町遺跡などが確認されている。また、火焚面遺跡南東の広い範囲において、水田脇の用水路などから土師器・須恵器などが表採される。

調査の結果 南の調査区に 3 箇所、北の調査区に 1 箇所の計 4 箇所の調査トレンチ (2m×3m) を設定し、バックホウで掘削を行った。いずれのトレンチも遺構は確認されなかった。遺物については、南調査区に設定した 3 T で古墳時代のもつと見られる土師器片 1 点が出土したが、流れ込んだものと見られる。

2・3 T で確認した黒褐色粘土層は、遺物包含層の可能性を考えて慎重に掘削を行ったが、遺物を含まなかった。この層は 1 T では確認されなかった。

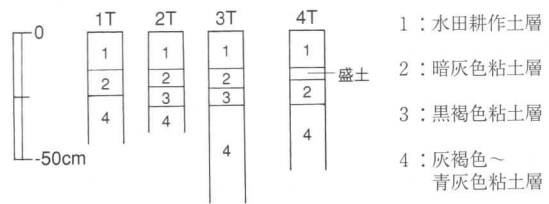
北調査区に設定した 4 T は、計画地に榎町遺跡の広がりがあるかを確認するためのトレンチである。前述のとおり、遺物・遺構は確認されず、遺跡は広がらないと判断した。



第 14 図 調査地及び周辺の遺跡 (1/20,000)



第 15 図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第 16 図 土層柱状図 (1/30)



写真 8 4T完掘状況

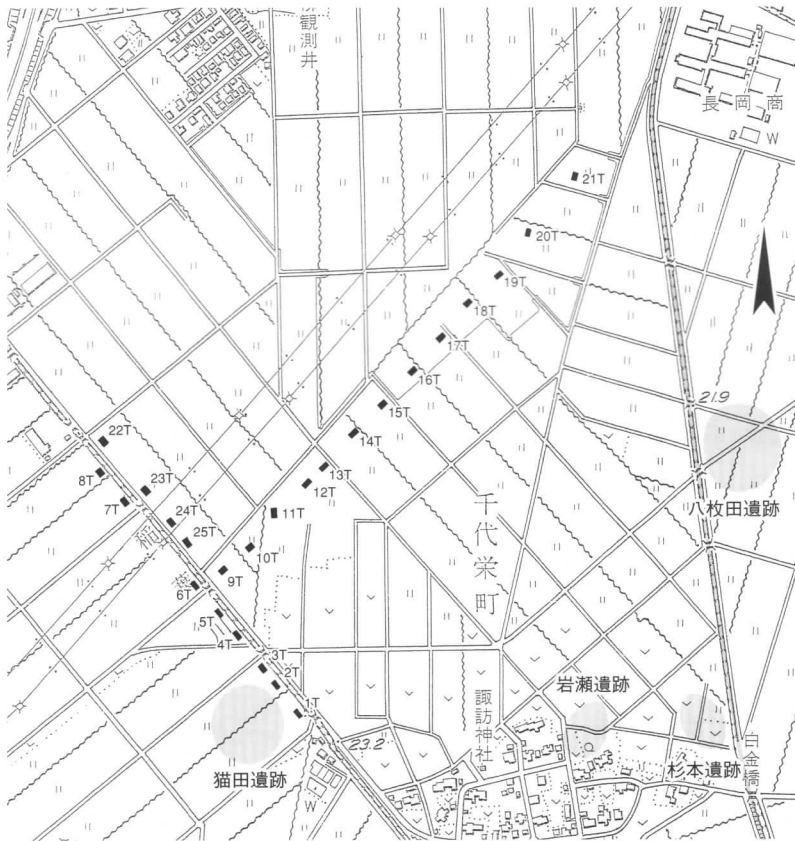
7 中沢地区試掘調査

調査地 長岡市中沢町・千代栄町 ほか 調査面積 208.1 m² (対象面積 44,100 m²)
 調査期間 平成 19 年 11 月 6 日～8 日 調査担当 鳥居美栄

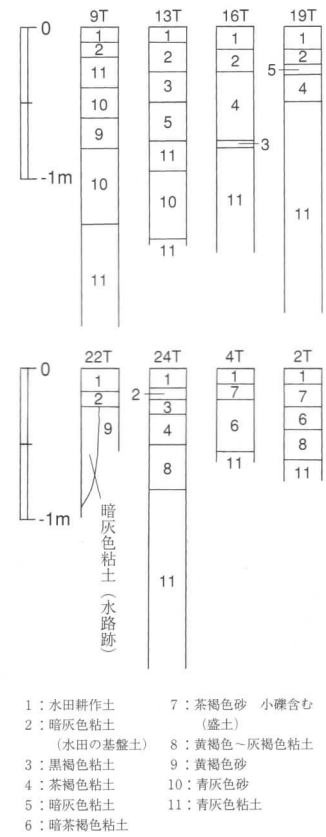
調査に至る経緯 平成 19 年 6 月、新潟県長岡地域振興局災害復旧部河川改良第 2 課から稲葉川河川拡幅及び放水路新設計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、協議を行った。猫田遺跡が隣接することや八枚田遺跡の立地状況から、試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することになった。

調査地の概要 信濃川右岸に広がる沖積地にあり、現況は水田である。北に向かって緩やかに傾斜しており、標高は約 19～21m である。調査地南端付近の自然堤防上に千代栄町の集落が営まれている。その縁辺には猫田遺跡をはじめとする古代・中世の遺跡が所在する。沖積地に所在する八枚田遺跡は、山北用水の工事現場で平安時代の土師器・須恵器が採集されたことで発見され、深い位置に所在すると推測される。

調査の結果 河川拡幅・放水路建設予定地を中心に、25 箇所の調査トレンチを設定し、バックホウで掘削を行った。事業計画では深さ約 2 m の掘削が予定されており、その深度を目安として調査を行った。猫田遺跡の周辺はヒューム管の埋設等による攪乱部分が多い。猫田遺跡から離れる沖積地では、水田の基盤土と青灰色粘土・砂層との間に黒褐色粘土や黄褐色～茶褐色土が確認されるトレンチがあるが、遺物・遺構の検出はない。また、いわゆるガツボ層はいずれのトレンチにおいても確認されない。5 T や 22 T など暗青灰色粘土が入る落ち込みを確認したが、近世以降の陶磁器片や結桶の側板などがわずかに混入するのみであり、新しい時代の水路と見られる。出土遺物は、5 T の攪乱土中から出土した土師器片 1 点以外は前述した近世以降の遺物のみである。以上から、工事計画地に遺跡は所在しないと判断した。



第 17 図 周辺の遺跡及びトレンチ配置図 (1/10,000)



第 18 図 土層柱状図 (1/50)

- 1: 水田耕作土
- 2: 暗灰色粘土 (水田の基盤土)
- 3: 黒褐色粘土
- 4: 茶褐色粘土
- 5: 暗灰色粘土
- 6: 暗茶褐色粘土
- 7: 茶褐色砂 小礫含む (盛土)
- 8: 黄褐色～灰褐色粘土
- 9: 黄褐色砂
- 10: 青灰色砂
- 11: 青灰色粘土

8 宮本前田地区試掘調査

調査地	長岡市宮本町1丁目字前田	調査面積	110.0 m ² (対象面積 33,000 m ²)
調査期間	平成19年9月3日	調査担当	鳥居美栄

調査に至る経緯 平成19年1月、越後ながおか農業協同組合営農経済部営農企画課から、団体営ほ場整備事業宮本前田西田地区の計画地における遺跡の有無について照会があり、協議を行った。事業計画地に周知の遺跡は所在しないが、周辺は黒川の氾濫原であり、未周知の遺跡が埋没している可能性が考えられた。協議の結果、平成19年施工予定範囲を宮本前田地区として試掘調査を行い、遺跡が発見された場合は遺跡の保存方法について別途協議をすることとなった。

調査地の概要 調査地は黒川左岸の水田中にあり、標高は約31~32mである。昭和27~30年に河川改修及び土地改良事業が行われたことにより、周辺地域での水害はほとんど発生しなくなっているが、旧来の黒川は氾濫を繰り返す暴れ川であった。調査地やその周辺はかつての氾濫原に当たり、これまでに遺跡は確認されていない。一方、周辺の低位段丘上や丘陵では縄文時代や古代、中世の集落遺跡や中世に築かれた塚群などが確認されている。現在の白鳥町や宮本町の周辺は、平安時代末期に白鳥荘が成立したと考えられている。黒川左岸側にある大塚をはじめとする多くの塚や岩野原館跡、右岸側の中之坊寺院跡、白鳥の古銭畑などは、中世に有力な勢力が存在したことをうかがわせる。

調査の結果 ほ場整備事業に係る既存道路の撤去後、試掘調査を実施した。事業による掘削等の影響が及ぶ深さまでを調査対象とし、削平が計画されている範囲を中心に13箇所の調査トレンチを設定した。掘削はバックホウ及び人力で行った。調査地の大部分は過去の土地改良事業などによって既に削平されていたが、遺物包含層と見られる黒灰色~暗灰褐色粘土層を2T・3T・11T・13Tにおいて確認した。地山は明灰色または灰白色の粘土層であるが、1Tや8Tにおいて標高的に高い位置で青灰色粘土層が確認され、黒川の流路変化の影響が考えられる。13Tにおいて包含層上面から掘り込まれている溝状遺構を確認したが、中世以前と見られる遺構はいずれのトレンチでも検出できなかった。包含層から遺物を出土したのは2Tと13Tである。また、トレンチのほかには5Tと9Tの間の既設道路を撤去した周辺などに少量ながら遺物が散布していた。出土遺物は、平安時代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼・青磁である。

以上から、調査対象地には平安時代、中世の遺跡が所在していたと考えられる。しかし、まとまった形での遺物の出土はなく、遺構も確認されないことから、黒川が形成した自然堤防上に営まれた小規模遺跡と推測される。事業による影響範囲までを調査対象としたため、さらに深い位置の確認はできなかったが、遺跡が埋没している可能性も否定できない。

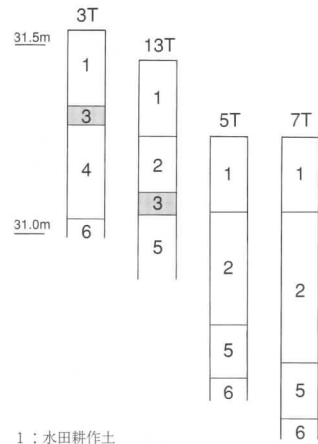
なお、遺跡の所在が確認されたことから、その範囲を宮本前田遺跡として周知化するとともに、遺跡の保存方法について事業者と協議を行った。遺跡の大部分は既に削平されていることや、工事内容や整備事業後の耕作による遺跡への影響は低いと判断されたことから、慎重工事により遺跡の保存を図ることとなった。



第19図 調査地位置図 (1/20,000)

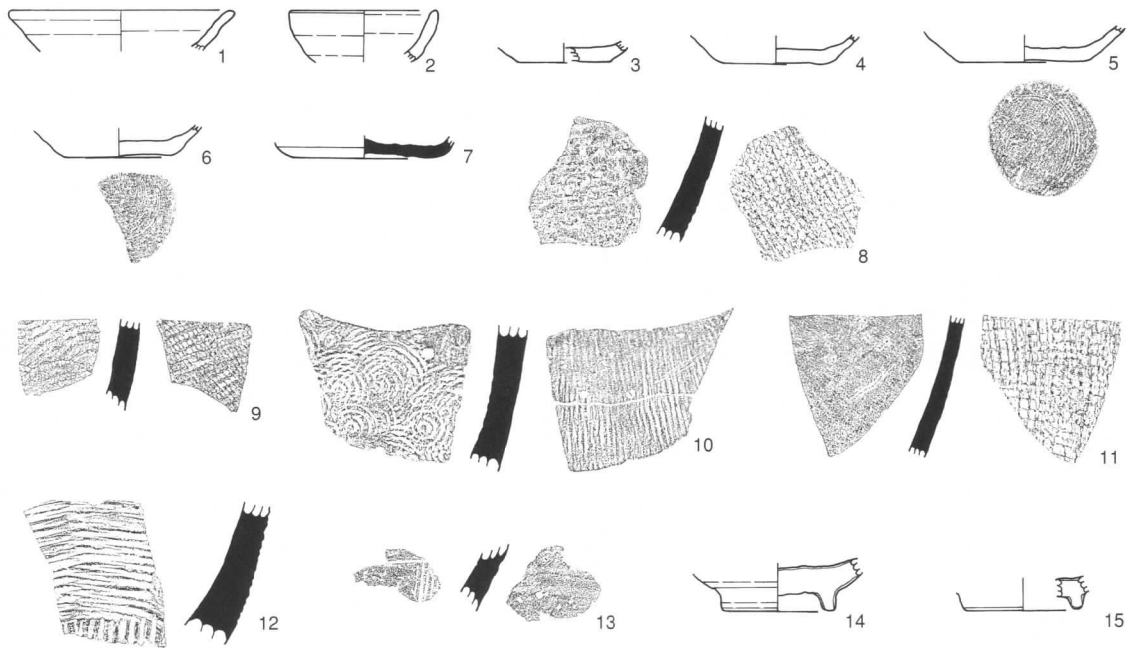


第20図 トレンチ配置図(1/5,000)



- 1: 水田耕作土
- 2: 灰褐色粘土層 炭化物を少量含む
- 3: 黒灰色～暗灰褐色粘土層 炭化物を含む
- 4: 明灰色粘土層
- 5: 灰白色粘土層
- 6: 青灰色粘土層

第21図 土層柱状図(1/20)



第22図 遺物実測図(1/4)



写真9 3T完掘状況



写真10 溝状遺構検出状況(13T)

9 宮本西田地区試掘調査

調査地 長岡市宮本町4丁目字西田 調査面積 166.0 m² (対象面積 62,000 m²)
 調査期間 平成19年10月15日～16日 調査担当 駒形敏朗

調査に至る経緯 平成19年1月、越後ながおか農業協同組合営農経済部営農企画課から団体営ほ場整備事業計画地における遺跡の有無について照会があり、協議を行った。本事業地の西工区である宮本前田地区において試掘調査を行い、その結果を受けて東工区である宮本西田地区の試掘調査について検討を行うこととなった。宮本前田地区の試掘調査により遺跡が確認され(12-13頁参照)、宮本西田地区にも遺跡所在が予測されたため、試掘調査をして遺跡の有無を確認することにした。

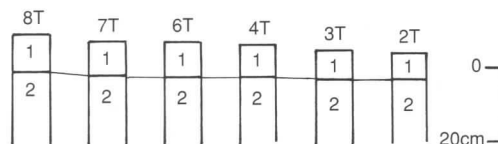
調査地の概要 調査の対象地は、通称「西山丘陵」の麓を、北へ向かって流れる黒川左岸の低湿地に位置する。現況は標高28mから30mほどの水田である。

調査の結果 宮本西田地区の工事計画は、畔を切り替えて1枚のは場(水田)を広げる計画であり、掘削は深いところでも20cmほどと浅い。調査は2×4mを原則としたトレンチを設けて、バックホウと人力で発掘した。水田1枚につき、1箇所(1)の調査トレンチを基本として、つごう21箇所(2)に設定した。

調査において遺物は1点も出土せず、遺構も確認されなかった。10cmほどの水田耕作土(第23図土層柱状図の1層)の下は、すぐに青灰色粘土層(第23図土層柱状図の2層)で、遺物包含層と思われる土層が堆積していない。これらから、本調査対象地には遺跡は存在しないと考えられる。



写真11 調査地近景



第23図 土層柱状図(1/20)



第24図 トレンチ位置図(1/5,000)

10 関原地区試掘調査

調査地 長岡市関原町1丁目
 調査期間 平成19年8月23日

調査面積 16.0 m² (対象面積 96 m²)
 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 平成19年7月10日、事業者から関原町1丁目における携帯電話通信用鉄塔建設事業に係る埋蔵文化財包蔵地の照会があった。開発予定地は周知の遺跡ではないが、周辺は鎌田山遺跡・三十稲場遺跡など縄文時代中～後期の集落跡が分布しており、これらを取り巻く小遺跡が存在する可能性があることから、試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとした。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸に形成された河岸段丘の北端（関原面）に位置する。調査地は北西方向に下る緩斜面であるが、黄褐色風化火山灰土層は南西方向にも傾斜しており、南西側（現況水路付近）に開析谷があったと推測される。

調査の結果 幅1.6m×長さ10mのトレンチを設定して調査を実施した。トレンチ東端で縄文土器がまとまって出土した。出土した土器は小形の深鉢土器で、縄文施文が確認できる。全体的に器表面が剥落していることもあり、詳細な時期は判然としないが縄文時代後期の資料であると位置づけたい。また、前述したように黄褐色風化火山灰土層の傾斜は強いが、土器の出土レベルはほぼ水平であった。このことは、遺物が残された時期には南西方向の傾斜が緩くなっていたことを物語っている。

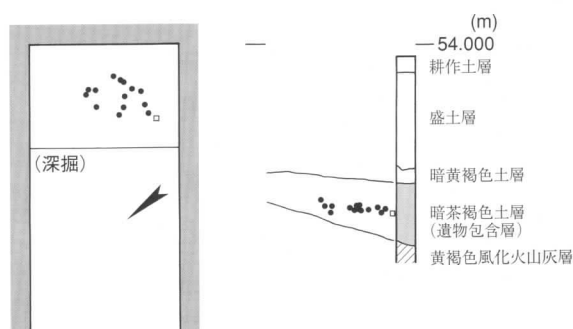
調査後、小字名に基づき「遠藤遺跡」として周知化を行なった。調査地点はその北西外縁に残された小規模な活動痕跡だと推測される。



第25図 調査地位置図 (1/5,000)



第27図 土器実測図 (1/3)



第26図 遺跡分布図及び土層柱状図 (1/80)



写真12 遺物出土状況 (北西から)

11 柿地区試掘調査

調査地	長岡市柿町字郷の原	調査面積	6.0 m ² (対象面積 100 m ²)
調査期間	平成 19 年 7 月 30 日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯 平成 19 年 7 月 9 日、柿町地内の携帯電話通信用鉄塔建設事業予定地について、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するか否かの照会があった。開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当しないが、縄文時代の遺物散布地である山下D遺跡の西側近接地であるため、現地を確認した上で改めてその取り扱いについての協議をもつこととした。

現地確認は翌 10 日に行った。山下D遺跡が立地する台地は北東側が緩く傾斜して開けており、その一方で、西側はやや傾斜が急な崖状になっている。開発予定地との距離は約 60m であるが、その比高差は約 13m あり、地形的な連続性は低く、山下D遺跡がここまで広がっている可能性は低いと判断された。しかし、開発予定地の自体の立地は、現況で集落が展開する馬の背状微高地の東縁部である。このことから、未発見の遺跡の有無を確認することを目的に、また、山下D遺跡を確認する意味も含め、試掘調査を実施することとし、事業者はその旨を伝えた。同日、地権者から試掘調査の了解を得たため、早期に調査を実施することが決定した。

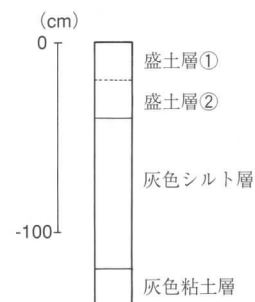
調査の結果 幅 1.5m×長さ 4 m のトレンチを設定し、バックホウを用いて調査を実施した。調査地点では、表土となっている盛土層（ローム系）の下に、さらにもう一層盛土（灰色）が入り、その下に灰色シルト層、暗青灰色粘土層という堆積状況を確認した。また、盛土層と灰色シルト層の間には、暗茶褐色土層が局所的に残存している。工事深度が現地表面から約 200 cm という開発計画であったが、深度 90 cm あたりから壁面からの差し水が激しくなったため、深度 120 cm まで調査した段階で調査を終了した。調査において遺構・遺物は確認できなかった。調査トレンチによって確認した土層の堆積状況からも、開発予定範囲に未発見の遺跡が存在する可能性は極めて低いと言える。



第28図 調査地位置図 (1/5,000)



写真13 完掘状況 (東から)



第29図 土層柱状図 (1/40)

12 午ノ新田地区試掘調査

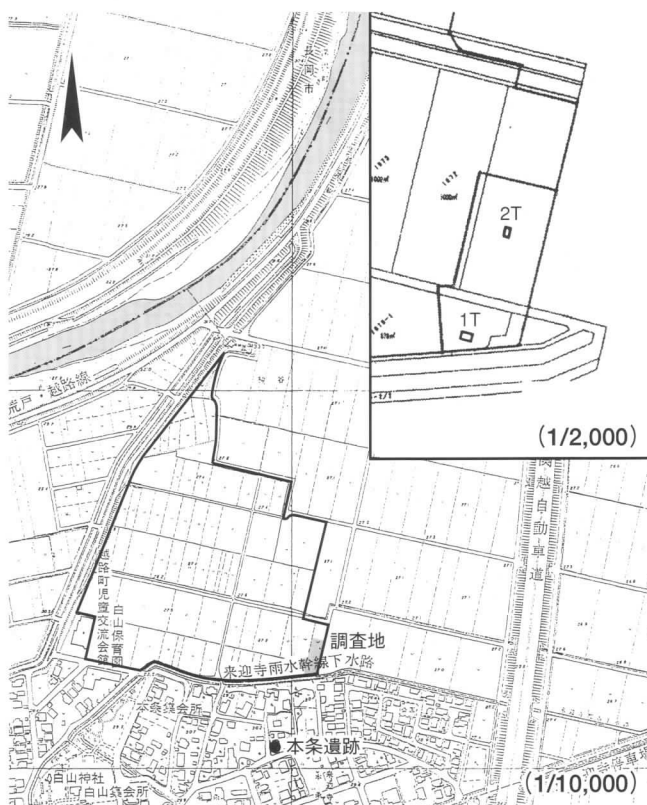
調査地 長岡市来迎寺字午ノ新田 調査面積 10.0 m² (対象面積 895 m²)
 調査期間 平成 19 年 11 月 26 日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 午ノ新田地区の開発事業（宅地造成事業）に係る埋蔵文化財の取り扱い協議は、平成 10 年 6 月まで遡る。開発予定地が周知の本条遺跡に近接するため、事業内容が確定した段階で試掘調査を実施して遺跡の広がりを確認することとなった。その後、平成 13 年度・平成 15 年度に調査を実施する計画が立てられたが、結局、調査実施には至らなかった。

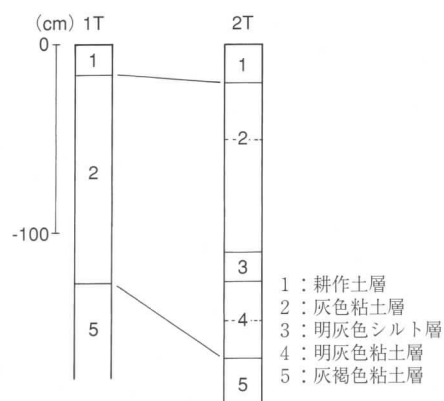
平成 19 年度に入ると、事業主体が地元組合から民間企業に変更され、事業も急速に進捗した。9 月 20 日に基本設計を基に協議を行った。設計では切土工が調整池部分に限定されるため、ここを対象に試掘調査を実施することとした。残り宅地部分は現況に約 100 cm の盛土で造成されることから、今回の試掘調査対象からは除外し、調整池部分での調査結果により再度対応を協議することを決めた。また、調査は用地の売買契約完了後に実施することも決定した。

調査地の概要 調査地は洪海川右岸の沖積地に位置する。調査地の南に広がる沖積段丘上（来迎寺面、現在の本条集落）に本条遺跡（平安時代）が位置する。本条遺跡は個人住宅の改築工事の際に発見された遺跡であり、地下約 150 cm（黒色土層中）から須恵器片（甕）が出土している。

調査の結果 2 箇所のトレンチを設定し、バックホウを用いて調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。本条遺跡の遺物包含層が地下約 150 cm 付近に堆積する黒色土層であることを考慮し、深度約 200 cm まで調査を進めたが、この層は検出できなかった。したがって、調整池については特に問題ないものと判断した。造成地内の道路計画部分については、4 月に試掘調査を実施する予定である。



第 30 図 調査地位置図及びトレンチ配置図



第 31 図 土層柱状図 (1/40)



写真 14 1T 堆積状況 (西から)

13 中の坪地区試掘調査

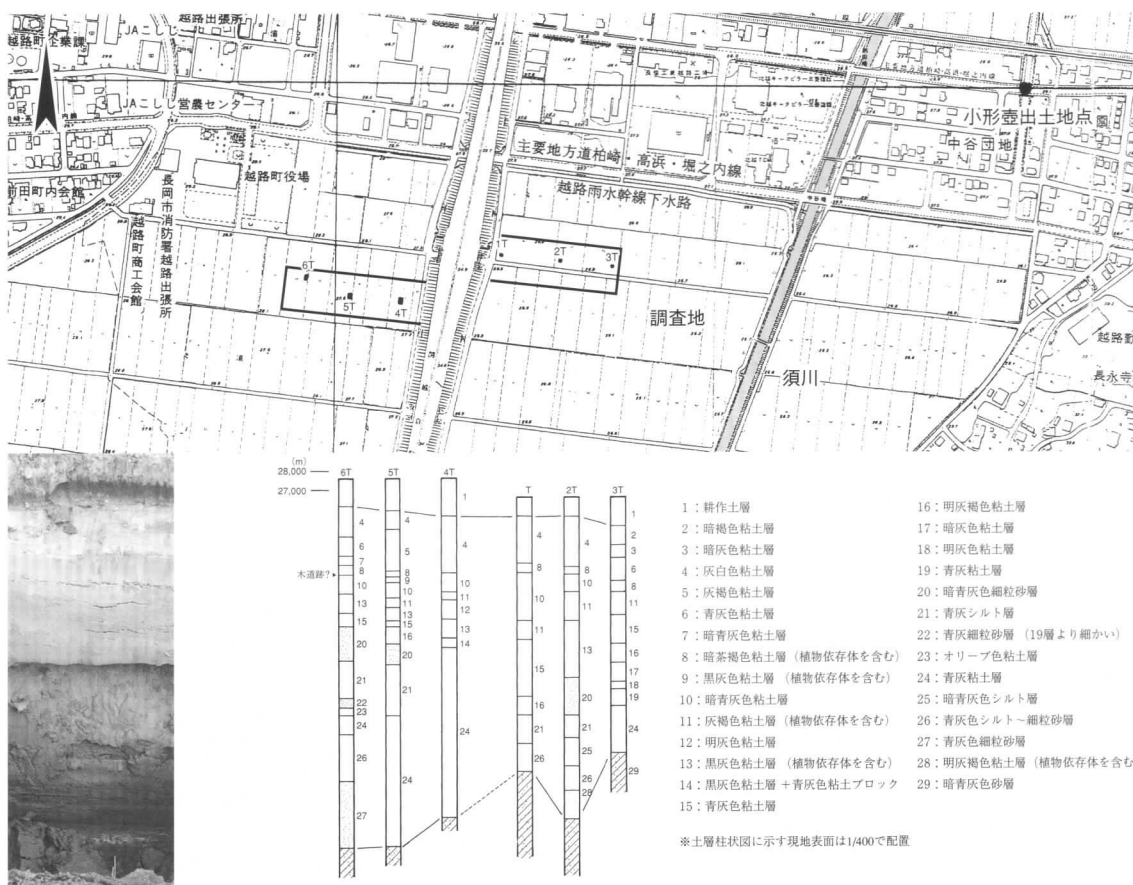
調査地 長岡市浦字中の坪 調査面積 92.3 m² (対象面積 25,000 m²)
 調査期間 平成 19 年 9 月 11 日～14・26 日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 平成 19 年 2 月 5 日、長岡市役所交通政策課から関越自動車道インターチェンジ新設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての照会があった。開発予定地から北東の地点で、JR 信越線架橋道工事中、地下約 3.6m の泥炭層から縄文時代後期後葉の小形壺が出土したという事例がある。この土器は須川によって運ばれたとも推測されているため、試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとした。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸、越路原段丘面と浦段丘面に挟まれた沖積地に位置する。河川改修工事以前は、須川がしばしば流路を変え、周辺は氾濫原になったという。

調査の結果 深度 3～4 m を目標に調査を進めた。関越自動車道の東側 (畑地) は、用地の制約から軽量矢板で土留めをして堅掘し、用地の制約のない西側調査区 (水田) は段を付けながら掘削した。3 T で溝状のプラン、6 T で木組跡を確認したが、明確に遺跡とする判断材料に欠ける。したがって、工事着手には特に問題ないものと判断される。

6 T の木組跡は、現地表面から約 93 cm の深度にあり、幅約 14 cm・厚さ約 4 cm の割材が 2 列平行に配置されていた。これに交差する板材も一部残存していた。また、調査において炭化物を含む黒灰色粘土層を確認しているが、土用木西遺跡 (長倉町) など平安時代の遺物包含層となっている土層に近似している。3 T の溝状プランはこれを覆土とするものの、遺物が出土しなかったため時期は不明である。



第32図 トレンチ配置図 (1/10,000) 及び土層柱状図 (1/80)

14 朝日上ノ山地区試掘調査

調査地	長岡市朝日字上ノ山	調査面積	256.4 m ² (対象面積 81,970 m ²)
調査期間	平成 19 年 10 月 4 日～5 日	調査担当	新田康則

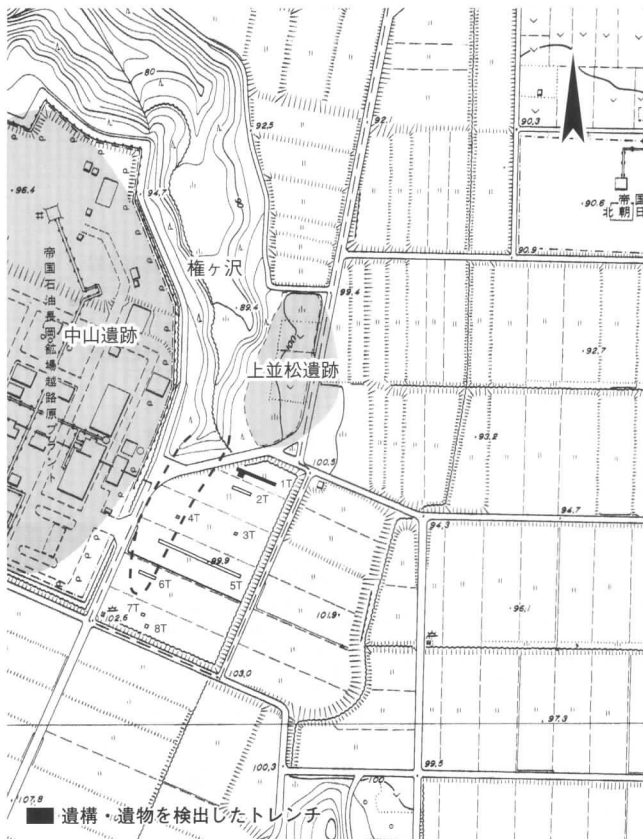
調査に至る経緯 平成 19 年 7 月、帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場から、同社越路原プラント拡張工事に係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての照会があった。開発予定地は、上並松遺跡と中山遺跡に隣接することから、試掘調査の実施が望ましい旨を回答し、事業者の了解を得た。

調査地の概要 調査地は、信濃川左岸の越路原 I 段丘面の北縁部、権ヶ沢と呼ばれる開析谷の谷頭に位置する。調査地周辺は昭和 40 年代の越路原総合開発事業により、地形改変を受けている。

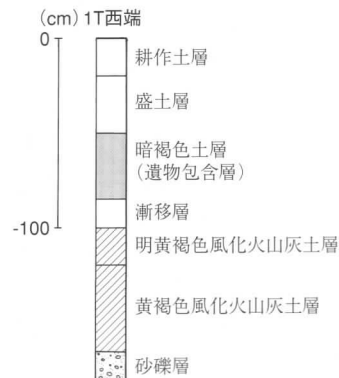
調査の結果 調査によって包蔵地が確認された場合、両遺跡との関係性を検討する上で、出土遺物の内容もさることながら、地形的要素が大きな材料となり得るため、権ヶ沢端部のあり方を確認することを考慮しながら調査を進めた。調査地はおおむね黄褐色風化火山灰土層まで削平を受けていたが、1 T と 2 T の西端に暗褐色土層が残存しており、1 T から縄文土器が少量出土した。いずれも小破片だが、刺突文や網目状捺糸文が施されているものが含まれており、縄文時代後期前葉に位置づけられる。

この時期の遺物は中山遺跡 (A 地区) でも上並松遺跡でも出土しているが、前者は比較的新しい段階かつ関東地方の影響が色濃い一群 (堀之内式～加曾利 B 式併行) を主体とし、後者では比較的古い段階の在来系土器群 (三十稲場式～南三十稲場式) が優勢する傾向があること、また、調査地西側に権ヶ沢の端部 (埋没谷) を確認したことから、今回検出した遺物出土域は上並松遺跡の南端であると解釈したい。

なお、この範囲の取り扱いについては、協議の結果、盛土工法で現状保存される予定である。



第 33 図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第 34 図 土層柱状図 (1/40)

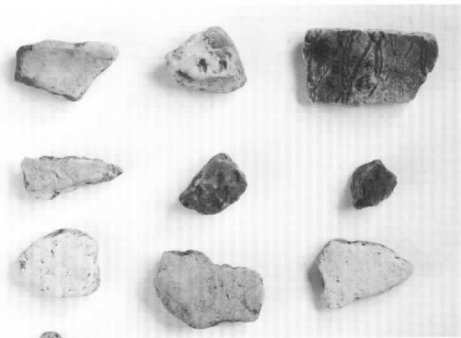


写真 15 1T 出土土器

15 赤木地区試掘調査

調査地	長岡市山古志東竹沢	調査面積	73.1 m ² (対象面積 7,500 m ²)
調査期間	平成 19 年 4 月 23 日～26 日	調査担当	新田康則

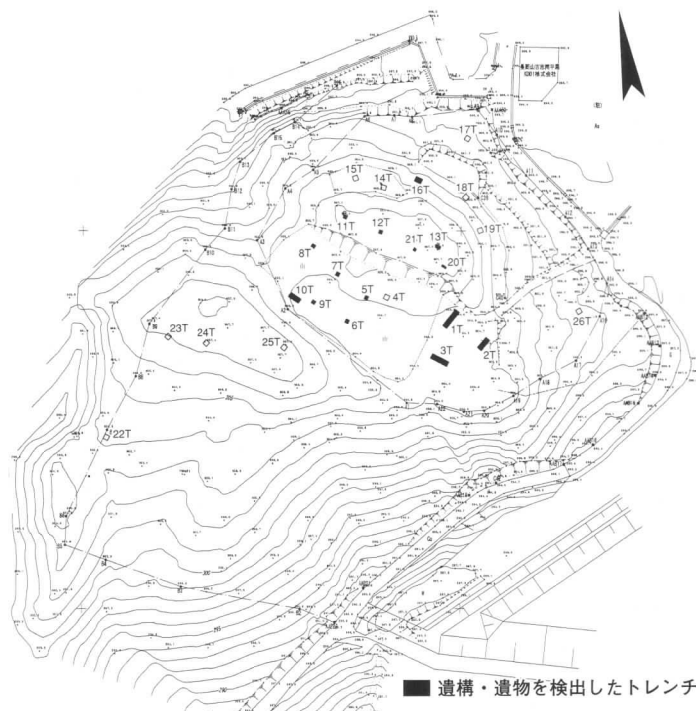
調査に至る経緯 平成 19 年 2 月 28 日、長岡市役所山古志支所産業課から山古志闘牛場駐車場新設工事に係る埋蔵文化財の取り扱いについての協議依頼があった。開発予定地は、遺跡地図では未周知であるが、『山古志村史』に記載されている赤木遺跡の位置に該当し、また地元ではここが赤木遺跡と認知されているという情報を教育委員会山古志分室から得たため、雪解けを待って試掘調査を実施することとした。

調査地の概要 芋川支流東川左岸の丘陵に位置する。この丘陵は北東がやや小高くなっており、中央部はカール状に窪んでいる。また、丘陵南西はやや広い尾根状になって延びている。

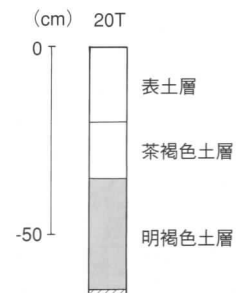
調査の結果 26 箇所でトレンチ調査を実施した結果、北東側と中央部において縄文時代の遺物包含層を検出した。北東側に設置したトレンチから遺物が多く出土しており、ここが遺跡の主体であると推測される。

出土遺物の一部を第 37 図に示した。『山古志村史』では火焰型土器が主であるが、今回の出土遺物では後期初頭の土器が充実している。1～6 は中期中葉の土器で、1 は大木 8 b 式併行、2～5 が火焰型土器である。7 は中期中葉～後葉の土器である。8～14 は後期初頭の「多賀屋敷式」とされる一群である。8～11 は沈線による区画を撚糸文で充填する。12 は加飾隆帯を区画とし胴部は撚糸施文となる。13 は口縁部に蓋受けを作出する。15 は南三十稲場式土器であろう。16～28 は縄文、29・30 は撚糸文、31～37 は条線文が施される。38 は無文土器。39 は石皿片である。13T で検出した土坑から出土した。

調査の成果を踏まえて事業者と協議を重ねた結果、北東側についてはほぼ現況のまま緑地帯、中央部については盛土をして、遺跡を現状保存する設計で工事を進めることとなった。また、赤木遺跡の範囲を今回の調査区域へと変更した。



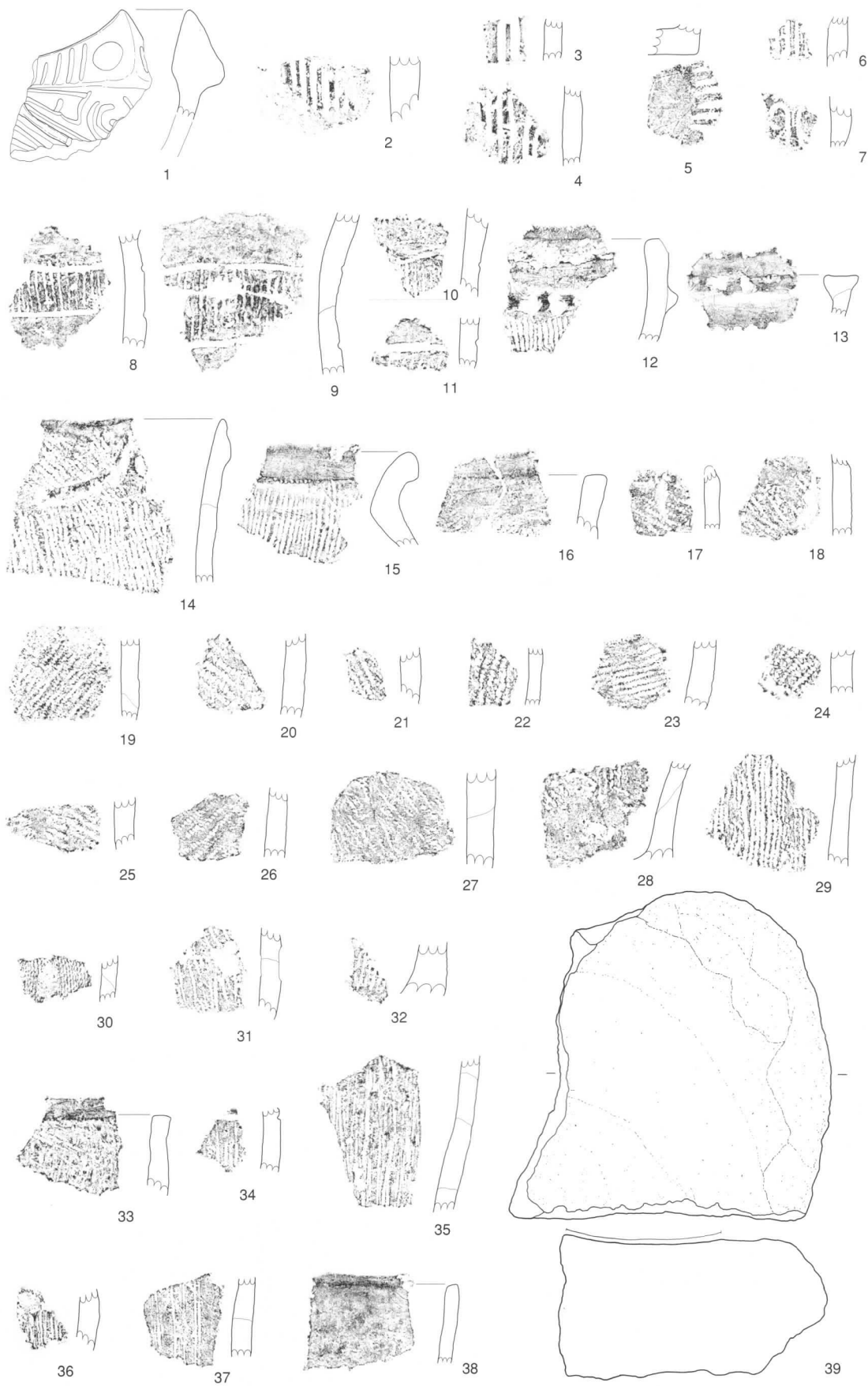
第 35 図 トレンチ配置図 (1/2000)



第 36 図 土層柱状図 (1/20)



写真 16 13T-SK1 完掘状況 (東から)



第37图 遗物实测图 (土器 1/3 石器 1/4)

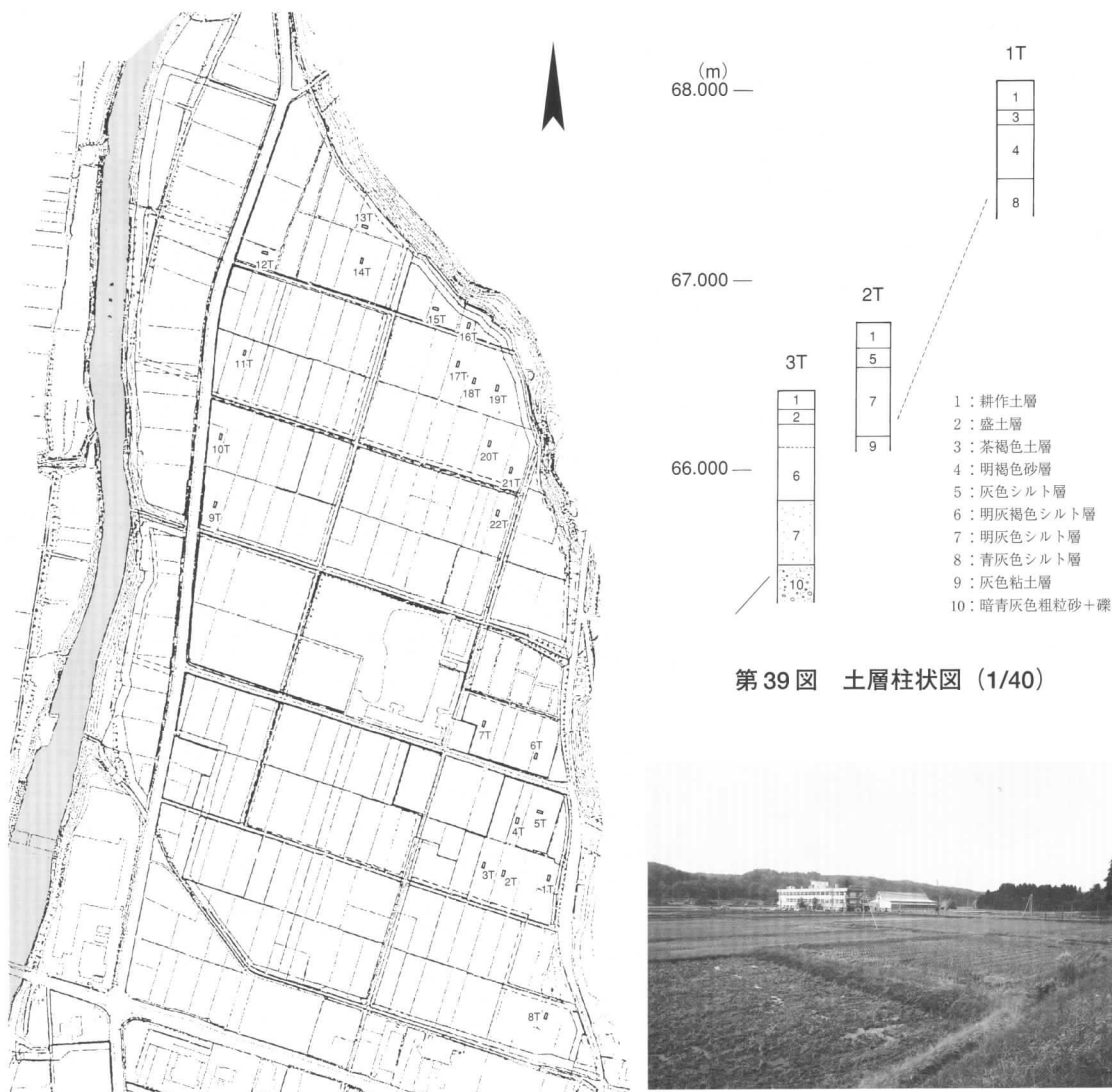
16 小国北部地区試掘調査

調査地	長岡市小国町七日町	調査面積	217.7 m ² (対象面積 98,000 m ²)
調査期間	平成 19 年 11 月 2 日～6 日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯 県営ほ場整備事業の計画に先立ち、平成 15 年 4 月に事業計画地を対象に分布調査を実施した。その結果を踏まえ、試掘調査が必要な区域を設定し、平成 16 年度以降、工事予定に合わせて試掘調査を実施しており、平成 20 年度面工事予定地内において試掘調査を行った。

調査地の概要 小国北部地区は洪海川右岸の沖積平野～沖積段丘上に位置する。昨年度調査区域では現況水田面以下 70～140 cm の深度に近世期の水田に伴うと推測される杭列等を確認している。また、今年度調査区域の東、一段高い段丘の西縁にハバムキ遺跡（縄文時代中期）が位置する。

調査の結果 調査対象地のうち、切土工法による工事が計画されている箇所を中心に合計 22 箇所のトレンチを設定して調査を行った。3 T で挿鉢片、4 T と 6 T で杭列を伴う溝跡を検出したが、昨年度調査で検出したものと同様、近世期に属するものと推測する。いずれも工事の影響が及ばない深度であるため、工事の着手については特に問題がないと判断した。



第 39 図 土層柱状図 (1/40)

第 38 図 トレンチ配置図 (1/7,000)

写真 17 調査地近景

17 小国西部地区試掘調査

調査地 長岡市小国町横沢 調査面積 225.0 m² (対象面積 8,820 m²)
 調査期間 平成 19 年 11 月 6 日～9 日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 県営ほ場整備事業の計画に先立ち、平成 16 年 4 月に分布調査を行った。少量ながら、縄文土器片や土師器片が発見されたことから、開発区域全体を試掘調査の対象とすることとなった。今年度は来年度工事予定範囲において試掘調査を実施した。

調査地の概要 調査地は洪海川左岸の沖積地である。昭和 30 年頃に区画整理が行なわれたが、大規模な地形改変はなく、畔の付け替えと整地程度の工事であったという。

調査地は現在平坦な地形である。だが、各層の検出レベルなどから単純に推測すると、礫層までは起伏の激しい地形であったが、その後に堆積した砂層・粘土層などにより徐々に平坦化していったという形成過程が考えられる。

調査の結果 用排水路工事箇所を対象に 23 箇所のトレンチ調査を実施し、22Tにおいて明灰色シルト層中から土師器片が1点出土した。口縁部資料であるが、時期は判明しなかった。包含層を確認できなかったため2次堆積であると推測する。恐らく、22T南側(現況宅地)の微高地、もしくは調査区西側の台地から流れ込んだものであろう。



18 中里北地区確認調査

調査地	長岡市小国町法坂	調査面積	87.0 m ² (対象面積 140 m ²)
調査期間	平成 19 年 5 月 7 日～11 日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯 平成 18 年 10 月に実施した試掘調査で、21T から剥片がまとまりを見せて出土した。これら剥片は縄文時代の石器製作跡を構成するものとも推測された。しかし時期や性格を断定する材料に乏しく、さらに詳細な調査を実施する必要がある。全体的な調査日程において平成 18 年度内に追加調査の実施が困難であったため、事業者や関係者との協議の結果、今年度春に実施することになった。

調査地の概要 調査地は洪海川右岸に形成された沖積段丘の西縁部に位置する。

調査の結果 平成 18 年度調査で、遺物出土地点の南側は後世の攪乱を受けていることが判明していたため、トレンチを北側に拡張する形で調査区を設定した。バックホウで表土層などを掘削し、包含層上面からは人力で作業を進めた。

調査区全体をジョレンで面的に掘り下げたところ、北側で剥片が出土した。調査区北西側の堆積状況が悪かったこともあり、調査を北東側に限定した。

最終的には剥片 2 点を新たな資料として追加することとなった。第 44 図 1 はチャート製の剥片である。礫打面をもち、頭部調整が残される。2 は安山岩製の縦長剥片である。礫面を打面とし、頭部調整を加えずに剥離されている。

これら剥片には礫が伴っている。礫は 10 点出土し、閃緑岩が多い。完形率 60% と比較的高く、被熱等の痕跡は確認できなかった。重量は 8.1～259.3 g で、その平均値は 71.3 g である。礫の出土レベルは平均で 74.573 m であり、剥片の出土レベルの平均 74.645 m と比べて低くなっている。

今回出土した剥片と昨年度出土した剥片では、剥片剥離にやや差異がみられるが、出土レベルがほぼ同じであることから、現時点では同時期のものとして捉えたい。

また、遺物（剥片・礫）が現位置を保っていたと判断し、調査後にこの範囲を「上川原遺跡」として周知化した。



第 42 図 調査地位置図

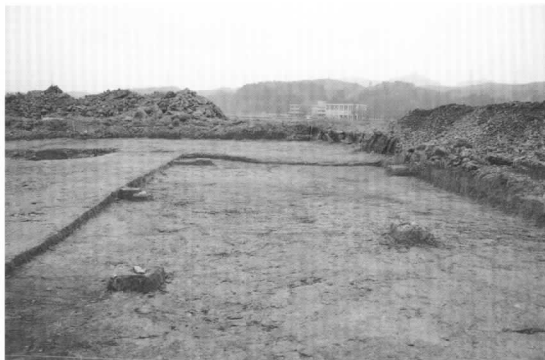
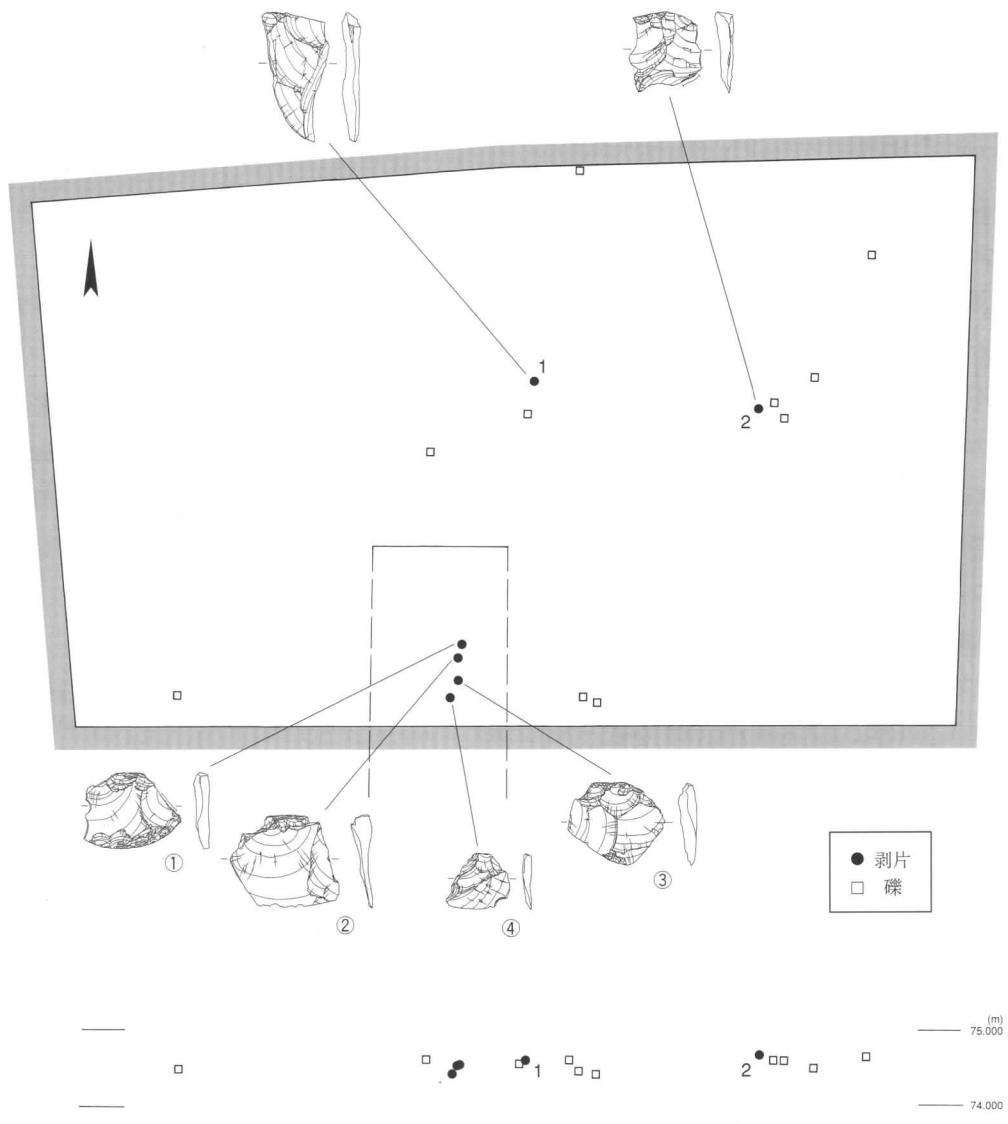


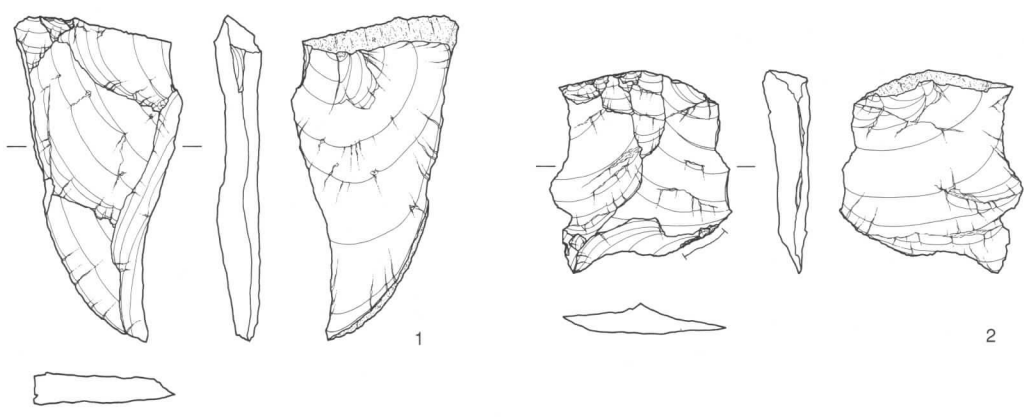
写真 20 遺物出土状況1 (東から)



写真 21 遺物出土状況2



第43図 遺物分布図 (1/100)



第44図 遺物実測図 (4/5)

19 中里北地区試掘調査

調査地	長岡市小国町新町・上谷内新田	調査面積	1,006.8 m ² (対象面積 200,860 m ²)
調査期間	平成 19 年 10 月 11 日～11 月 2 日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯 県営ほ場整備事業地を対象に平成 13 年 12 月に分布調査を実施し、その結果を踏まえて、平成 14 年度以降、継続的に試掘調査を実施してきた。今年度も引き続き調査を実施した。

調査地の概要 調査地は洪水川右岸の沖積平野～沖積段丘上に位置する。現況は水田および荒蕪地である。旧来蛇行していた洪水川の流路に沿うように、城遺跡(中世城館跡)、新町上の原遺跡(縄文)、そして、昨年度～今年度春の調査で新たに発見された上川原遺跡(24-25 頁参照)が立地している。段丘上に立地する新町上の原遺跡は、昭和 30 年ごろの小国診療所の駐車場建設に伴う整地作業の際、多数の遺物が出土したと言われている。調査前の聞き取りでは、段丘の下(北側)の田んぼでは耕作土層中に縄文時代の遺物が含まれるが、これは診療所建設の際に生じた残土を段丘崖に押し出すように廃棄したことが影響しているとのことであった。

調査の結果 82 箇所でもトレンチ調査を実施した。調査区南側で縄文時代と中世の遺跡を確認した。また、調査区東側、28T で珠洲焼片が出土した。これは遺構に伴うものではなく、また明確な遺物包含層もないため、流れ込み等によるものだと判断する。

(1) 縄文時代 34・52・68T で縄文時代の遺物が出土した。34T の剥片・68T の不定形石器は単独出土である。52T では当初 1.9×5.2m の設定で調査を実施したところ、暗褐色盛土層(2次堆積層)の下層は青灰シルト層であり、遺跡はないと判断した。ただし、暗褐色盛土層には多量の土器・石器が含まれていた。聞き取り結果から、この遺物は新町上の原遺跡のものとして特定できるため、遺跡の内容を把握することを目的に、トレンチを拡張して可能な限り遺物を取り上げることとした。その結果、拡張したトレンチの南東で、暗褐色盛土層(2次堆積層)の下に、縄文時代の遺物包含層を検出した。半完形の土器(写真 23・第 46 図 35)が出土していることなどから、段丘からの流れ込みではなく、崖線の下に形成された捨て場である可能性が高い。その取り扱いについて事業者との協議を重ねたが、この地点の現状保存は難しく、新町上の原遺跡の一部として平成 20 年 6 月ごろ本発掘調査を実施することに決まった。

52T から出土した遺物の一部を第 46 図に示した。縄文時代中期中葉～後期前半の時期幅をもつ。1・2 は大木 7 b 式併行の土器、3～5 は火焰型土器、6～8 は大木 8 a 式併行の土器である。7・8 は口縁部文様に楕円のモチーフを配置する。35 は大木 8 a～8 b 式併行の粗製深鉢である。9～14 は大木 8 b 式併行の土器、15～18 は沖ノ原式土器である。19 は大木 10 式併行に位置づけられる土器であろう。20～26 は三十稲場式に併行する一群である。26 は深鉢の突起であろうか。27～34 は南三十稲場式土器である。36 は耳飾で、刺突が施されている。37 は頁岩製の板状石器、38 は石錘、39 は脚付の石皿片である。

(2) 中世 47・48・49・50・53・56・58・60・67・81T で黒灰色土層を覆土とした遺構(土坑・溝)を確認している。このうち 58T・60T・67・81T で中世の遺物が共伴していることから、遺構も中世に帰属するであろう。特に 67T では、掘立柱建物跡と推測される土坑群と溝状遺構、13 世紀初頭の中世土師器(無台皿・有台皿ないし碗)と青磁片・羽口の先端部が出土している(第 47・48 図、写真 26・28)。また、81T で検出した土坑も配列関係をもつだろう。60T からは溝の覆土から舶来青磁片(写真 27)が出土した。

中世の遺構・遺物が確認された範囲は、小字名に基づき「谷内田遺跡」として周知化した。また、協議の結果、工事計画の変更によって遺跡の現状保存が図られることとなった。



■ 遺構・遺物を検出したトレンチ

第45図 トレンチ配置図 (1/5,000)

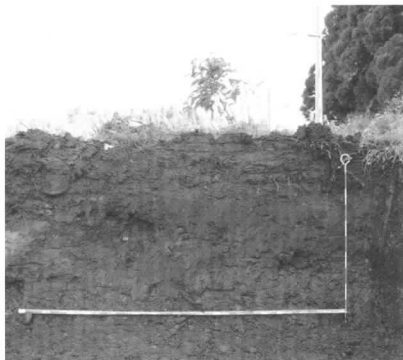
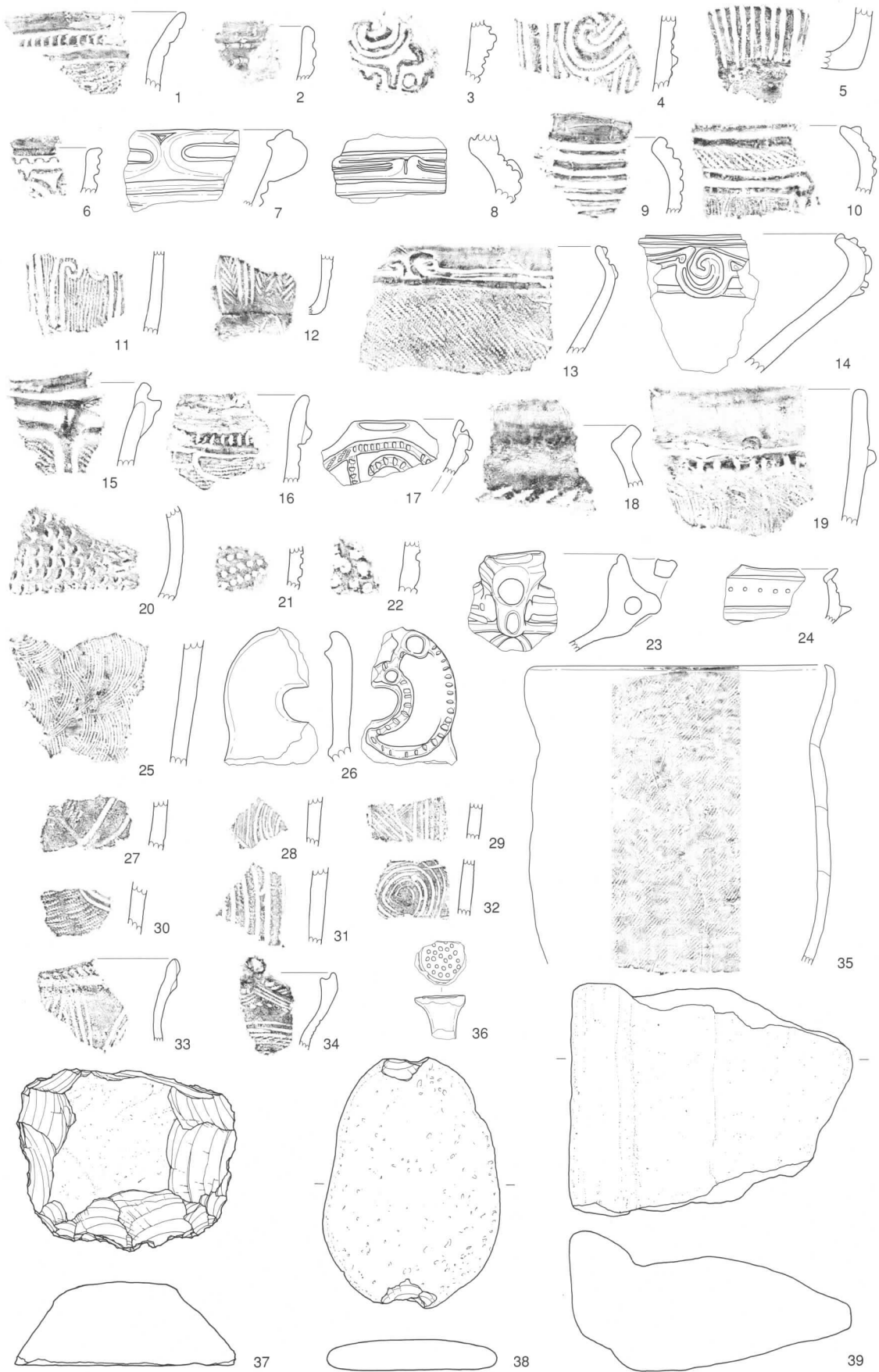


写真22 52T堆積状況



写真23 52T土器出土状況



第46图 52T出土遺物実測図 (1~34・36:1/4 35:1/6 37~39:1/2)



写真 24 58T 遺構検出状況 (西から)



写真 25 81T 遺構検出状況 (西から)



写真 26 67T 遺構検出状況 (西から)

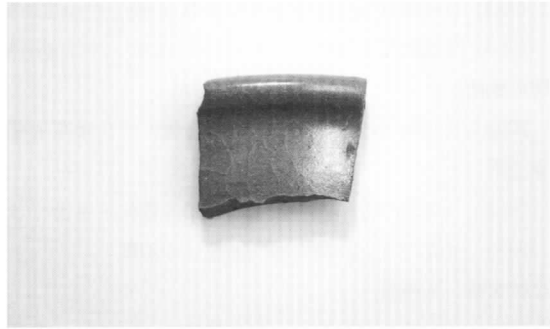
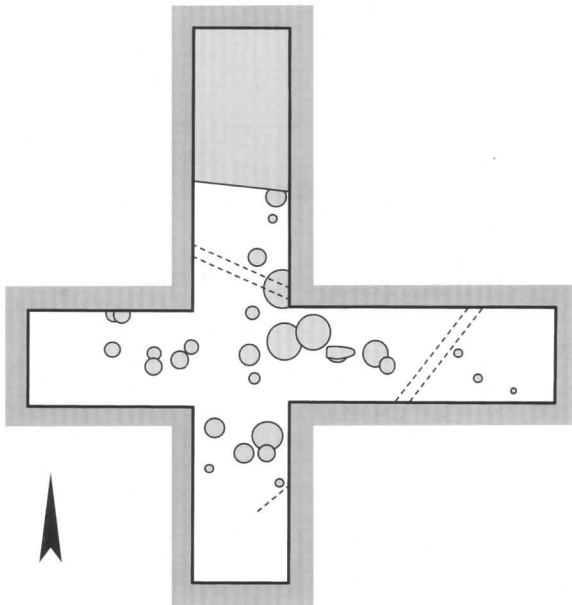
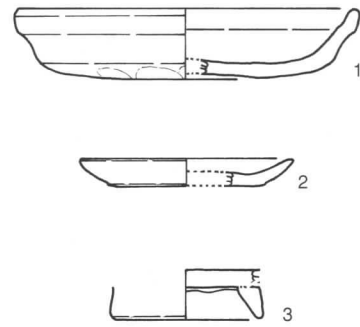


写真 27 60T 出土青磁



第 47 図 67T 遺構配置図 (1/150)



第 48 図 67T 出土土師器実測図 (1/3)

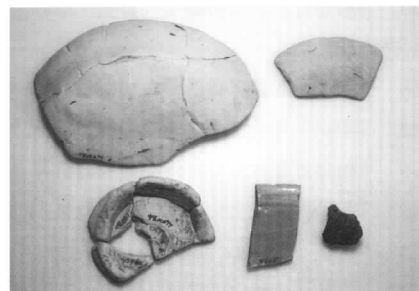


写真 28 67T 出土遺物

参考文献

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

1988 『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編・資料編

小国町史編集委員会

1976 『小国町史』 本文編 牧野功平（小国町）

越路町

1988 『越路町史』 資料編 1 原始・古代・中世 越路町

越路町教育委員会

1970 『越路町文化財調査報告書第3輯 越路原総合調査報告書 朝日百塚・上並松遺跡』 越路町教育委員会

1983 『越路町文化財調査報告書第9輯 中山遺跡発掘調査報告書』 越路町教育委員会

1983 『越路町文化財調査報告書第11輯 中山遺跡第2次発掘調査報告書』 越路町教育委員会

駒形敏朗

2002 『長岡市内遺跡発掘調査報告書 千代栄町地区』 長岡市教育委員会

寺泊町

1991 『寺泊町史』 資料編 1 原始・古代・中世 寺泊町

1992 『寺泊町史』 通史編 上巻 寺泊町

寺村光晴・久我勇

1960 『寺泊乃おいたち 先史遺跡について』 寺泊町教育委員会

鳥居美栄

2005 「長岡市富島町周辺における新発見の遺跡」『長岡市立科学博物館研究報告』第40号 長岡市立科学博物館

長岡市

1992 『長岡市史』 資料編 1 考古 長岡市

長岡市教育委員会

2006 『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

2007 『平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会

広井造・小熊博史

1999 「信濃川の歴史的意義」『長岡市立科学博物館研究報告』第34号 長岡市立科学博物館

「ふるさと宮本」編集委員会

1991 『わがふるさと宮本』 「ふるさと宮本」発刊委員会

分水町

2005 『分水町史』 資料編 I 考古・古代・中世 分水町

2006 『分水町史』 通史編 分水町

栃尾市文化財審議会

1988 『栃尾の城館』 栃尾市教育委員会

和島村

1996 『和島村史』 資料編 I 自然・原始古代・中世・文化財 和島村

和島村教育委員会

1998 『和島村埋蔵文化財調査報告書第7集 下ノ西遺跡 出土木簡を中心として』 和島村教育委員会

1999 『和島村埋蔵文化財調査報告書第8集 下ノ西遺跡Ⅱ』 和島村教育委員会

2000 『和島村埋蔵文化財調査報告書第9集 下ノ西遺跡Ⅲ』 和島村教育委員会

2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』 和島村教育委員会

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうきゅうねんどながおかしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成19年度長岡市内遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	新田康則・駒形敏朗・鳥居美栄・小林徳・丸山一昭・加藤由美子						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1						
発行年月日	2008年3月21日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
いむらまえいせき 居村前遺跡	ながおかしでらどまりもとへんあざいむらまえ548番地ほか 長岡市寺泊本弁字居村前548番地ほか	152021	1236	373748 1384738	20071001 ～20071109	90.0㎡	県営ほ場整備事業
いなほいせき 稲場遺跡	ながおかしでらどまりおおじあざいなほ317番地ほか 長岡市寺泊大地字稲場317番地ほか	152021	1249	373822 1384706	20071001 ～20071109	12.0㎡	県営ほ場整備事業
ちゅうじめいせき 中使面遺跡	ながおかしでらどまりおおじあざちゅうじめい407番地ほか 長岡市寺泊大地字中使面407番地ほか	152021	1283	373821 1384712	20071001 ～20071109	18.0㎡	県営ほ場整備事業
まくじまいせき 幕島遺跡	ながおかしでらどまりとうしんでん1911番地ほか 長岡市寺泊当新田1911番地ほか	152021	1284	373831 1384813	20071001 ～20071109	12.0㎡	県営ほ場整備事業
てんのういせき 天王遺跡	ながおかしでらどまりしろいわあざいざき485番地ほか 長岡市寺泊白岩字井崎485番地ほか	152021	1285	373907 1384747	20071001 ～20071109	18.0㎡	県営ほ場整備事業
みやもとまえだいせき 宮本前田遺跡	ながおかしみやもとまち1ちよめあざまえた564番地ほか 長岡市宮本町1丁目字前田554番地ほか	152021	1279	372717 1384520	20070903 ～20070903	110.0㎡	団体営ほ場整備事業
えんどういせき 遠藤遺跡	ながおかしせきはらまち1ちよめ3441番地ほか 長岡市関原町1丁目3441番地ほか	152021	1278	373650 1384544	20070823 ～20070823	16.0㎡	携帯電話通信用鉄塔建設
かみなまついせき 上並松遺跡	ながおかしあさひあざかみのやま227番地1ほか 長岡市朝日字上ノ山227番地1ほか	152021	406	372315 1384614	20071004 ～20071004	65.6㎡	天然ガス処理施設関連事業
あかぎいせき 赤木遺跡	ながおかしやましひがしたけざわおつ474番地ほか 長岡市山古志東竹沢乙474番地ほか	152021	537	371933 1384529	20070423 ～20070426	73.1㎡	駐車場建設
うえがわらいせき 上川原遺跡	ながおかしおぐにまちほろざかあざうえがわら333番地1 長岡市小国町法坂字上川原333番地1	152021	1277	371754 1384226	20070507 ～20070511	87.0㎡	県営ほ場整備事業
あらまちうえのほらいせき 新町上の原遺跡	ながおかしおぐにまちあらまちあざやちだ362番地ほか 長岡市小国町新町字谷内田362番地ほか	152021	546	371738 1384222	20071022 ～20071101	126.0㎡	県営ほ場整備事業
やちだいせき 谷内田遺跡	ながおかしおぐにまちあらまちあざやちだ375番地ほか 長岡市小国町新町字谷内田375番地ほか	152021	1286	371740 1384216	20071018 ～20071102	218.2㎡	県営ほ場整備事業
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
いむらまえいせき 居村前遺跡	遺物包含地	縄文	なし	縄文土器			
いなほいせき 稲場遺跡	遺物包含地	平安	溝	土師器・須恵器			
ちゅうじめいせき 中使面遺跡	遺物包含地	平安	なし	土師器・須恵器			
まくじまいせき 幕島遺跡	遺物包含地	縄文	なし	縄文土器			
てんのういせき 天王遺跡	遺物包含地	平安	ピット	土師器・須恵器			
みやもとまえだいせき 宮本前田遺跡	遺物包含地	平安、中世	なし	土師器・須恵器・珠洲焼・青磁			
えんどういせき 遠藤遺跡	遺物包含地	縄文	なし	縄文土器			
かみなまついせき 上並松遺跡	遺物包含地	縄文	なし	縄文土器			
あかぎいせき 赤木遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	縄文土器・石器(石皿・剥片)			
うえがわらいせき 上川原遺跡	遺物包含地	縄文	なし	剥片			
あらまちうえのほらいせき 新町上の原遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	縄文土器・土製品(耳飾)・石器(打製石斧・三脚石器・板状石器・石錘・石皿・剥片)			
やちだいせき 谷内田遺跡	集落跡	中世	溝・土坑	土師器・青磁・木製品(下駄)・羽口			舶来青磁出土

平成 19 年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

平成 20 (2008) 年 3 月 17 日 印刷

平成 20 (2008) 年 3 月 21 日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス
